HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 藻場を中心とした浅海生態系の管理方式の検討 |
| Author(s) | 敷田, 麻実 |
| Citation | 日本藻類学会第27回大会. 平成15年3月27日～平成15年3月30日. 津市 |
| Issue Date | 2003-03-29 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/35490 |
| Type | conference presentation |
| Note | 要旨の出典：日本藻類学会第27回大会プログラム. 日本藻類学会. 2003. p.81 |
| Additional Information | There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL. |
| File Information | 1254-2PP.pdf (プレゼンテーション資料) |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

## 今日の話題

- 沿岸域管理とは
- 管理対象の拡大
- 沿岸域管理による藻場管理



## 沿岸域管理とは何か

- CZM（Coastal zone management, coastal management）
- 沿岸域の環境や資源を好ましい状態で維持するために、それに影響を与える人間の利用を調整する考え方とその仕組み、そしてその実践

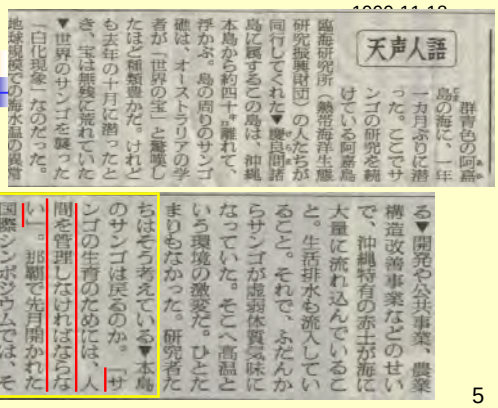
敷田・末永（2003）から



## 沿岸域管理小史

- 1980年代までのアクセス権の要求拡大
  - 同時期に「組織化」論
- 1990年代に「持続可能性」の登場
- 米国の「エコシステムマネジメント」
- 21世紀は「生態系アプローチ」の時代
  - Bioregion(生態区？）で考える
  - 河川の流域管理





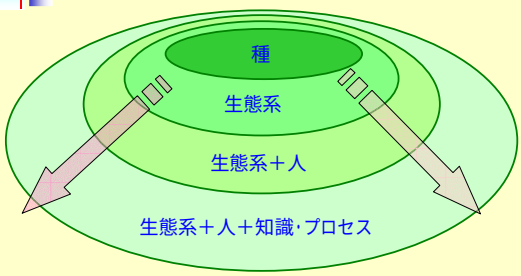
天声人語

群青色の阿嘉島の海に、一年一カ月ぶりに潜った。ここでサンゴの研究を続けている阿嘉島臨海研究所（熱帯海洋生態研究振興財団）の人たちが同行してくれた▼慶良間諸島に属するこの島は、沖縄本島から約四十キロ離れて、浮かぶ。島の周りのサンゴ礁は、オーストラリアの学者が「世界の宝」と驚嘆したほど種類豊かだ。けれども去年の十月に潜ったとき、宝は無残に荒れていた▼世界のサンゴを襲った「白化現象」なのだった。地球規模での海水温の異常

る▼開発や公共事業、農業構造改善事業などのせいで、沖縄特有の赤土が海に大量に流れ込んでいること。生活排水も流入していること。それで、ふだんからサンゴが虚弱体質ゆえ味になっていた。そこへ高温という環境の激変だ。ひとたまりもなかった。研究者たちはそう考えている▼本島のサンゴは戻るのか。「サンゴの生育のためには、人間を管理しなければならない」。那覇で先月開かれた国際シンポジウムでは、そんな発言があったそうだ。



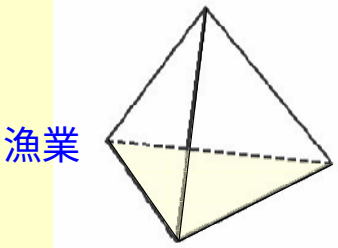
## 管理対象の拡大




敷田（2002）

## 沿岸域管理の構造モデル

沿岸域の管理



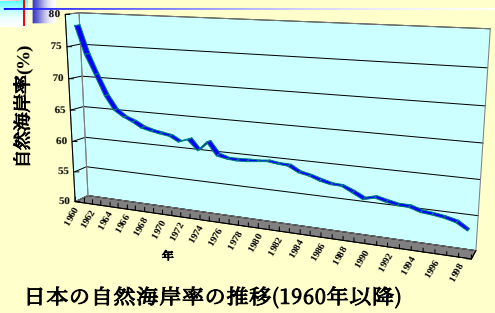
漁業　遊漁

資源保護・環境保全

7

## 沿岸域の改変の進行

## 自然海岸の減少(全国)




日本の自然海岸率の推移(1960年以降)

注：自然海岸率は倉田・小荒井(1996)の方法により算出

9

## 藻場に関する認識の共有

- 重要な沿岸域生態系、資源
- 身近な自然環境、

- 一方で藻場の破壊や喪失

**藻場の持続可能な利用**

10

## なぜ管理システムが不安定に?

- 新規参入者が現れる
- 技術革新が進む
- 資源や環境が変化する

だからアクターの問題を考える

11

## 沿岸域における「エコシステムマネジメント」

- 人間活動も含めた生態系は絶えず変化し、そのすべてを人間は理解できないが、科学的な知見に基づき、モニタリングしながら順応的に利用や管理することは可能である

12

## エコシステムマネジメント

- 最新の科学的知見に基づき、生態系と人間社会を統一的に捉えた管理の方向性！
- 生態系の複雑で多様なつながりを意図し、より大きい空間的スケールで管理をプランニング！
- 行政タテ割りの解消･地域住民との共同･協力を重視するため、実行は地域の視点で！

13

## 藻場から「場」へ

藻場の保全という技術論

↓

保全を通して生態系に関する知識を充実させる

↓

その場（ソーシャルキャピタル）づくり

14

## 沿岸域での理想的モデル

- 排他性の低いモデルが現実的
  - 地域外住民、都市住民（地域外者）の利用を前提に
- 持続可能なモデルが必要
  - 変化に柔軟である
- 環境保全と地域経済の両立が重要
  - 手を触れない「保護」では理解されない
  - 「飯が食えるか」に応える管理

15

## 変化に耐えうる管理とは･･･

- アダプティブマネジメント
  - （順応的管理）
- そのために必要な知識を用意する
- 知識を広く求めて、ネットワーク化
  - コラボレーション（協働）

16

## 沿岸域の危機････

- 水産振興を進めているが、水産業の衰退が感じられる
- 資源管理や環境保全を進めているが、必ずしもうまく行かない

17

## では、どうすれば？

- 変化を前提にする
  - 「変化しないのは、変化するということ」

＋

- 地域外からの影響を前提に
  - 自立にこだわらない、自律

↓

- 変化と影響に対応できる仕組みを創る

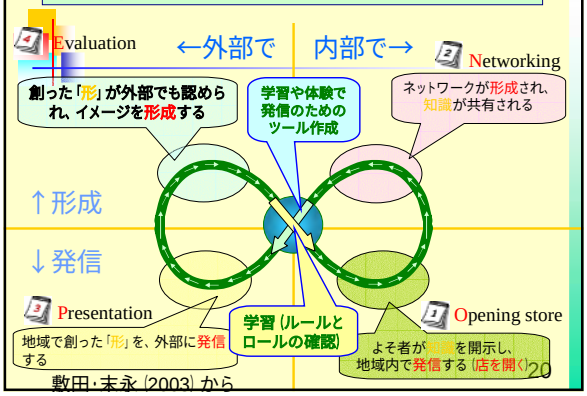
18

## いろいろな知識がいる！

- 科学的な「科学知」SEK
  - 研究や調査、専門家の知識
- 生活に基づく「生活知」TEK
  - 日常生活や職業現場で得る知識
- 手続きに関する「手続き的知識」
  - 行政的知識

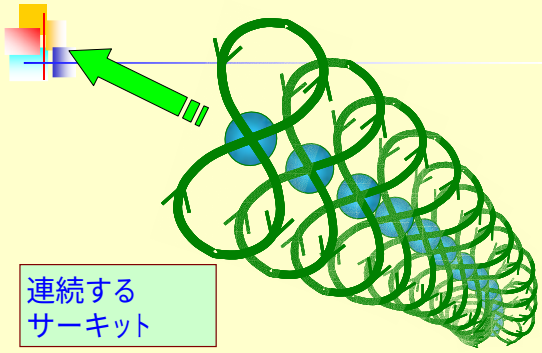
19

## 藻場管理のOPENサーキットモデル




敷田・末永（2003）から

20



連続する
サーキット

Copyright©2002 SHIKIDA/SUENAGA Version7.52-4.00

21

## 専門家の立場

- 専門的知見以上の客観性
- 選択肢の提示
- 危機感を煽るだけではだめ

22

## 問題解決コスト

- 藻場保全のコストの点検
- どの系で集計すべきか
- 費用便益分析
  - 利用と保全の費用と便益

23

連絡先　（どうぞご連絡下さい）
金沢工業大学　環境システム工学科　敷田麻実
Shikida@neptune.kanazawa-it.ac.jp

参考文献

敷田麻実・末永聡(2003)「地域の沿岸域管理を実現するためのモデルに関する研究－京都府網野町琴引浜のケーススタディからの提案」、『日本沿岸域学会論文集』、15：25－37.

敷田麻実（2002）「藻場を中心とした浅海生態系の管理方式の検討」,『水産工学』,39（1）：21-28.

END